

編集後記

春の学会シーズンも近づき、また何か新しいことをと、発表する人も聞く側もそれぞれに何となく期待の高まりを感じておられることと思います。

多方面の沢山の方々の努力と協力が少なくとも胃の病気の診断では、術前に病変の肉眼所見を推定できるまでにしたわけですが、つづいて病理所見の細かいところまで術前に診断する努力をしようというわけで、本号では胃癌の深達度の問題がとりあげられました。御承知のようにこの問題を云々するには非常に細かい病理学的検索の裏付けなしにはできないことです。それができるようになったということにも一つの大きな意義があると思います。やがてだんだんと問題が発展し、例えば座談会の中にも一寸ふれられていますが、粘膜筋板の役割りというようなことまで将来は論じられるようになるでしょう。

しかし本書の内容があまりむずかしく専門的になりすぎたとの声も読者の中から聞かれます。一方では専門的な研究書としての、一方では明日の実地臨床上にすぐに役立つものとしての両方の希望があるわけです。編集者一同頭の痛いところですが、考えようによってはそれだけ読者層が広がったということに充分の責任を感じつつ、ないちえをしぼりつつなるべく皆様の希望にそのようなものにしていきたいと思います。どうぞ遠慮のない御叱正を賜りますようお願い致します。

なお、昨年胃鏡学—胃学の泰斗シンドラ—先生が急逝されましたが、そ際のお悔みに対する奥様からのお返事で「世界中から沢山のお手紙をいのただいたが、それらの方々のうち主人は特に日本の多くの人達が主人のこれまでの仕事をひきつぎ、そしてより発展させて行く事を期待していた」という意味のことが述べられていた事を附記しておきます。

< 芦 沢 真 六 >

<編集> 早期胃癌研究会